

ISSN 0454-8302

神奈川歯学

KANAGAWA SHIGAKU



第46卷 抄録集 2011年学会総会
Vol. 46. Abstracts. December 2011

神奈川歯科大学学会雑誌
The Journal of the Kanagawa Odontological Society

CT画像による上顎洞内壁の解剖学的調査

○西尾和彦、渡辺孝夫、川口和子、今富収治、高橋常男

(肉眼・臨床解剖)

目的：上顎臼歯部におけるインプラント埋入術の一選択肢として上顎洞底挙上術がある。上顎骨内壁は本術式における上顎洞内の器具操作に関わる。一方、頬骨歯槽稜線と側頭下窩前縁の交わる点（ZAC点）は本術式の器具操作のランドマークとして有用な解剖学的構造である。今回、日本人患者のCT-X線画像データを用いてZAC点を基点とした洞内壁の解剖学的構造を検索したので報告する。材料および方法：CT-X線画像の資料は、某歯科（市川市、千葉県）を受診し、学術使用を承諾した患者のCT-X線撮影DICOMデータとした。対象患者は男性15名、女性35名の50名、その年齢は31歳から71歳まで、平均年齢は56.0歳、左右上顎骨を調査対象とした。CT-X線撮影装置は、Pre Vista Uni-3D 8×5(CBCT)、日本メディカルマテリアル(JMM)、実効焦点：0.5mm、管電圧：40～90kVp、管電流：2～10mAを使用した。形態計測はインプラントシミュレーションソフト(SimPlantTM, Materialize, Belgium)を用いた。次に、計測画面は両側ZAC点を結ぶ線(ZAC点間線)とそれより前方5mm、10mmおよび15mm、そしてそれより後方5mm、10mm、15mmおよび20mmの前額断面とした。CT-X線画像上での形態計測項目はZAC点間線からの垂直距離として洞底、鼻腔底、歯槽頂、および正中からの水平距離として内壁陥凹部、内壁豊隆部とした。結果：垂直距離として両側Z線から洞底まで 14.8 ± 3.5 mm、同鼻腔底まで 6.9 ± 3.2 mm および同歯槽頂まで 20.4 ± 4.1 mm、同陥凹部まで 7.5 ± 3.3 mmであった。水平距離として正中から内壁陥凹部まで 12.6 ± 2.7 mm、同内壁豊隆部まで 17.9 ± 1.8 mmであった。考察：今回の調査から洞内壁は洞内に突出し、洞底部で鼻腔側へ平均 5.3 ± 3.7 mmほど陥凹していた。Z点より前方では陥凹が大きく、後方ではほとんど消失していた。洞内壁での器具操作はこれらの形態学的特徴を踏まえて行う必要があると考えられた。結論：本調査より洞内壁は外側へ突出し、洞底部では内方へ陥凹していた。